

日本スプリント学会第 32 回大会

大会運営委員長 申間 敦郎

日本スプリント学会第 32 回大会が、神々のふるさと、天孫降臨伝承の地である宮崎で、11 月 27 日、28 日の 2 日間にわたり対面とオンラインのハイブリッドで開催されることになり、全国の皆様を心より歓迎いたします。本来は昨年と同時期に開催予定でありましたが、新型コロナウイルス感染症拡大のため、やむなく一年の延期をさせていただきました。会員の皆様には開催延期についてご理解をいただき、感謝に堪えません。

本学会大会のテーマは「スプリントのイノベーションを考える」です。1991 年に開催された東京世界選手権をターニングポイントとして、日本スプリント界は大きな発展を遂げることができたと考えています。この大会では、前会長の高野進先生が 400m において世界レベルの大会ではロスオリンピックの吉岡隆徳選手以来、短距離種目で約 60 年ぶりの決勝進出を果たしました。また、日本陸連は大会開催にあたり、現在の活動にも繋がる「バイオメカニクス研究班」を組織し、全ての種目において当時の最先端の技術を駆使し、世界のトップ選手の技術を分析しました。なかでも 100m で優勝したカール・ルイスらの世界トップ選手の技術と日本のスプリンターの技術を分析、比較し、キック動作の違い等を明らかにしたことで、後の指導者たちは、その研究成果をすぐさま指導に活かすことができました。その後のオリンピックや世界選手権においての多くの決勝進出、そしてメダル獲得につながっていった道程は、皆様ご存じの通りです。まさにこの大会は、日本国民に陸上競技の面白さを知ってもらい注目される機会となったと同時に、日本スプリント界のイノベーションの契機となる大会でもあったと思います。

近年のテクノロジーや ICT の急速な進歩により、誰もが最新の情報を手に入れることが可能になり、迅速なパフォーマンスのフィードバックや、日常のトレーニングにおいて、繰り返しフォームの確認等ができるようになりました。また新しいトレーニング法やそれに関連したトレーニング機器の開発などもなされています。これらのことが集積されていったことがイノベーションを生みだし、日本のスプリントは世界と戦えるようになってきたと考えられます。今回、シンポジストとして、山縣亮太選手（SEIKO）、高野大樹コーチ、そして陸連科学委員会の大沼勇人先生（関西福祉大学）をお招きしました。100m の日本記録樹立までの道程を紐解いていただけるものと思います。また全国インターハイでの複数回の総合優勝をはじめ、多くの優勝者を輩出されている北村肇先生（中京大中京高校）に、ワークショップをお願いしており、選手育成に繋がる多くのノウハウやヒントをいただけていると思っております。本学会大会が、皆様にとりまして、今後のご指導の参考となり、日本のスプリントの隆盛に繋がる多数の選手が輩出される一助になれば、幸甚に存じます。

学会大会へのご案内が、遅くなってしまいましたことをお詫び申し上げますと共に、多くの皆様のご来場、ライブ配信へのご参加をお待ち申し上げます。